

# 危険なビキニ

AI脳兵士

春日信彦

## 決意

9月2日（日）リノの承諾を得た安田は、早速、三島をさしはら温泉旅館に呼び出した。オービスを確認しながらバイパス202をぶっ飛ばしてきた三島は、到着予定時刻、午前11時より12分も前に到着した。マットブラックのスズキGSX-S1000を駐車場に止めた三島は、フルフェイスのヘルメットを右手に持ち、安田が待っている玄関までかけていった。笑顔で迎えた安田は、三島をティールームの窓際テーブルに案内した。三島がヘルメットとシルバーのライダージャケットを隣の席に置くと安田はマジな顔つきで話し始めた。「話というのは、例の件だ。リノとは、話がついた。俺は、決意した。モサドになる。だが、不安はある。モサドの活動について、具体的な話は聞いていない。おそらく、かなりヤバイんじゃないかと思っている。本当にモサドになっていいものか？」

タカの目のような鋭い目つきの三島は、じっと耳を傾けていた。表情を崩した三島も、モサドの活動内容については全く知らされていないことに気づき、質問した。「先輩、モサドって、何をやるんですか？命令されれば、何でもやりますが、暗殺、なんてことはないですよね」お金のことばかり考えていた三島は、今になって不安が込み上げてきた。安田はモサドの活動内容をしっかり把握したうえで結論を出すべきだと思い始めた。「俺たちは、革命のことばかり考えて、モサドのことを疑わなかった。勢いあまって、モサドを革命軍の味方だと思っていたが、果たして、信じていいものか？ヤコブが言っていることも信じていいものか？俺たちは、騙されているのかもしれない」

うつむいていた三島は顔を上げると不安そうな顔で話し始めた。「1000万の報酬額から考えて、並の仕事ではないでしょう。やはり、もう少し具体的な話を聞いたうえで、決断したほうがいいじゃないですか。俺は、お金が欲しいあまり、つい、話に乗ってしまったけど、直接、ヤコブから話を聞いてみたいと思います。話を聞いて、納得したうえで、返事したいと思います」腕組みをして話を聞いていた安田は大きくなずいた。「確かに。ちょっと、浅はかだったようだ。俺は、日本の若者を救いたい。だから、たとえ危険な仕事であっても、命を張ってでも、やる気はある。でも、それは犯罪行為ではあってはならない。テロであってもならない。あくまでも、不法行為とはならない、ぎりぎりの行為でなければならん。だからこそ、モサドに期待した。モサドは俺の考えに沿うものなのか？」

三島の不安はさらに増大していた。「先輩、モサドについてヤコブに聞いてみましょう。そして、もう一度、俺たちの考えと一致しているか、検討してみましょう。そうでないと、やっぱり、不安です。そうだ、今日の午後にでも、会えませんかね？」安田も三島と同じ考えであった。ロビーのライトをちょっと見つめるとうなずき返事した。「そうだな。今日の午後というのは、急すぎるような気もするが、とりあえず、ヤコブに電話してみよう」安田は、早速、スマホでヤコブのナンバーをタッチした。ヤコブの応答が返ってくると、三島とともにモサドについて具体的な話を聞きたい、とヤコブに伝えた。ヤコブは、善は急げとばかりに今日の午後は時間が取れると返事した。安田は、午後1時30分このティールームで落ち合う約束をした。

午後1時40分ころに、ヤコブがシルバーのベンツAGMでやってきた。190センチ近い巨漢のヤコブは、笑顔で二人の前に腰掛けた。「いや～～、待たせてしまって、申し訳ない。日曜日なのか、ちょっと混んでました。早速ですが、モサドに関する質問ですね。どんなことでも質問してください。不安があっては、決断がつきかねるのは、ごもっともです。どのような？」ヤコブは、すでに二人がモサドになる意向を読んでいた。安田は、一度、大きく深呼吸して話し始めた。「先日、報酬額のことは聞きましたが、具体的な仕事のことは聞いてない。当然、困難な仕事であることは承知しているが、不法行為になるような仕事は、俺たちにはできない。その点をはっきりさせたかった」

ヤコブは、大きくうなずき返事した。「心配は、不法行為でしたか。我々の仕事は、厳密に言えば、時には、不法行為となる場合もあります。でも、不法行為とならないように策を凝らして活動するのが、モサドなのです。我々は、テロリストでもなければ、マフィアでもありません。政府公認の合法的な組織です。確かに、各国の法に抵触する場合はあるでしょう。でも、我々は、決して庶民に危害を与えるような行為はしない。各国は、目に見えない情報戦争をしています。その中心になっているのがエリートエージェントたちなのです。具体的な行為は、まだモサド契約を結んでいないお二人には話せませんが、納得いただけますか？」二人は、静かに話を聞いていたが、不安はますます大きくなっていった。

安田は、やはりヤバイ仕事であることを直感した。だからといって、断っていいものか悩んだ。安田は、三島の固くなった表情を確認し、もう少し質問することにした。「高額な報酬から考えて、危険で重要な仕事であることは予測できる。なのに、なぜ、秀才でない俺たちのような凡人をモサドにしようとするのだ。俺たちよりもはるかに優秀な学生は他の大学にはたくさんいる。なぜだ？」ヤコブは、一瞬固まった。捨て駒に利用されるのではないかと安田は不安がっている、とヤコブは直感した。

「私は、二人を見込んでスカウトしている。本部にもスカウトする根拠を報告した。安田は、カリスマ性があり、弁舌に優れている。三島は、実直で、剣道チャンプだ。モサドは、武器を使わないインテリエリート兵士なのです。使うのは、頭脳と肉体だけだ。二人のような知能の低い学生をスカウトするのは、今回が初めてだが、仏教国の日本においては、知能よりカリスマ性を重視すべきと判断した」最もな意見のようにも受け取れたが、知能の低いエージェントなど聞いたことがない。モサドのエージェントは、語学に秀でていて、知能が高いと聞いていた。現に、ヤコブもイサクも語学堪能の天才だ。なのに、彼らからすればバカといえる俺たちをモサドにしようとしている。不思議に思わないほうがおかしい。

安田は、念をすように強い口調で質問した。「はっきり言って、他校の秀才たちと比べれば、俺たちはバカだ。こんな俺たちをモサドにして本当にいいのか？俺たちのような低能にモサドが務まるのか？英語もろくにしゃべれないんだぞ。こんな俺たちなんだ。それでも、俺たちをモサドに誘うのか？俺たちが仕事で失敗すれば、ヤコブの責任になるんじゃないのか。それでも、スカウトする気か？」ヤコブは、小さく何度もうなずきながら、マジな顔つきで話に聞き入っていた。すでに、関東と関西の優秀な学生が、スカウト候補に挙がっていた。それに加え、ヤコブは二人をスカウト候補に入れた。これは、ヤコブもかなり悩んだ決断だった。

ヤコブは、二人の表情を交互に見て話し始めた。「実を言うと、二人の勧誘にはかなり悩んだ。だが、私の新しい試みが正しかったことを証明したい。短期の出張はあると思うが、二人には、日本国内での仕事に限定するつもりだ。このことは、本部の承諾をとっている。当然、海外での仕事を担当させるために、知能の高い学生をほかにスカウトする。二人には、イスラエルの研究者と日本の研究者の仲介をやってもらいたい。また、彼らの身辺警護と監視に当たってもらいたい。AI兵器の研究は、イスラエル地下組織が行う。したがって、ベンチャー企業の表の顔として、対外的仕事をやってもらう。少しは、納得いただけたかな」

三島は、うなずきながら安田の顔を覗き見た。安田は、日本国内と聞かされ、ホッとした。単身赴任を心配していたからだ。安田は、念を押した。「俺らは、日本国内の仕事に専念するんだな。だったら、英語が話せない俺達でも、できなくもないような気もする」安田は、右横の三島の顔をちらっと覗いた。なんとなく自分たちの仕事がわかり始めたが、有能なモサドになるためのトレーニングはあるはずだと思った。「まあ、俺たちは国内の仕事をすればいいことはわかったが、一人前のモサドになるには、いろんな訓練を受けなければならないんだろうな。俺たちに、やれるかどうか？」

ヤコブは、即座に返事した。「当然です。二人の将来性を見込んで、スカウトしたのです。日本国内だからといって、英語ができなくていいとは言っていません。英語の特訓は課せられます。また、武術の特訓も課せられます。ボクシングとレスリングは必須です。これは、自分を守るためのものです。また、拷問にも耐えうる精神力をつけるためです。二人を同時にスカウトしたのは、お互い助け合って身を守ってほしいからです。できれば、武術にたけた三島は、安田を守ってほしい」拷問と聞いたとたん安田の顔が引きつった。だが、いまさら拷問が怖くなったから断る、とは言い辛かった。

拷問と聞き少し怖気づいた安田は、頭を掻きながら弱音を吐いた。「だよな。つまり、俺たちは危険極まりない仕事を任されるということだな。俺たちにできるだろうか？英語は全く話せないし。三島は、剣道チャンプだからボクシングもレスリングもやれるだろうが、俺ができるスポーツといえば、ゴルフぐらいだ。いや～～、全く自信がない」安田は顔を左右に素早く振ると意見を求めるような眼差しを三島に向けた。ヤコブの話の聞いていると三島も自信がなくなっていた。剣道バカの三島は、全く英語が苦手だった。英語ができなかったら、即刻クビになるのではないかと思い、尋ねた。「俺は、剣道バカで、勉強はできない。英語は特に苦手だ。英語ができないと、クビになるのか？」

ヤコブは、クスクスと小さな笑い声をあげ、笑顔を作り返事した。「二人とも思ったより気が小さいんだな～～。ヤマト民族は肝っ玉が小さいのか？英語ができないからといって、クビにはならない。だが、できるまで特訓される。英語のメールが読めないんじゃ、仕事はできない。英語も武術も拷問並みの特訓を覚悟してもらおう。命がかかっているからな。ヤマト民族なんだから、耐えられるだろう。二人とも、覚悟はできたかな」二人は、顔を見合わせて、小さくうなずいた。「ところで、モサドの契約は、大学卒業後でいいのか？」ヤコブはうなずいた。「モサドの契約は大学卒業後となるが、契約の前には、アブラハム局長の面接がある。そして、局長のOKが出れば、契約締結となる。できれば、それまでに英会話ぐらいは、やってもらいたいものだ」

契約まであと一年半の猶予がある。安田は、気が変われば、断っていいものか確認することにした。「いまさら、聞くのも何なのだが。今のところ、モサドになる覚悟ができた。でも、卒業までに自信を失った場合、その時点でモサドを断るってことはできるのか？」ヤコブは、大きくうなずき返事した。「当然、モサドを断ることはできる。また、我々も、二人を観察させていただき、不適格と判断した場合、不採用とする。今のところ、不採用にする気はないがね。私は、二人の活躍を期待している。ぜひ、前向きに考えてほしい。ほかに、質問は？」

三島は特になかったが、安田は、結婚のことを確認しておくことにした。「国外の仕事はないということで、ホッとしているんだが、俺は、卒業後、すぐに結婚する予定だ。そのことに関しては、問題ないのか？」ヤコブは、即座に返事した。「結婚に関する条件はない。だが、たとえ結婚相手であっても、モサドに関する情報は、一切話してはならない。そのことは、了解してると思うが」安田は、一瞬はっとした。すでに、リノにはモサドに関する話をしてしまった。このことを話しておくべきか悩んだが、後になって責められるより、今、話しておくべきだと勇気を振り絞った。「ヤコブ、実を言うと、婚約者にモサドになるということ話を話してしまった。もう、俺は失格か？」

一瞬ヤコブの顔がゆがんだが、笑顔で返事した。「いや、モサドに関する情報を流したわけではない。今後は、たとえ婚約者でも、モサドについては話さないように」安田はほっとした。そして、今後のことを確認した。「俺たちは、モサドの決意を固めた。卒業までに、英語会話のほかには何かやるべきことはあるか？」ヤコブは、満足そうな笑顔で答えた。「二人の決意を聞かせてもらっただけで我々は大きな収穫を得た。モサドの特訓は、正式な契約が交わされた後に行われる。大切なことは、健康管理と使命感だ。日本とイスラエルのために身をささげる心だ。二人なら、必ず使命を遂行できる。同志、力を合わせて、戦おうじゃないか。今後、何か質問があれば、いつでも尋ねてくれ」

安田は、三島に振り向きうなずいた。三島は、安田から聞いていた報酬のことが気になっていた。「ヤコブ、まだモサドになっていないのに、聞くのはおこがましいようだが、報酬の件を聞かせてほしい」三島には報酬の件は話していないことに気づき改めて話すことにした。「当然の質問だ。安田には話したと思うが、報酬は年俸10万ドルだ。年4回に分けて日本円で支払われる。当然、モサドの報酬は、表に出すことができない。だから、現金手渡しとなる。表向きはベンチャー企業の従業員ということになるから、各自の口座には給料分しか振り込まれない。本部命令の業務遂行における諸経費は、別途、請求次第支払われる」

三島は、安田から報酬の件は聞いていたが、ヤコブから直接聞いて、キツネにつままれたような気分になった。「報酬は、日本円で約1000万円。そのほかに諸経費もいただけるわけですか。信じられないエリート待遇ですね。我々にそれだけの価値があるんですか？」ニコツと笑顔を作ったヤコブは返事した。「ありますとも。将来、二人が実績を残していけば、報酬も上がります。先ほども言ったように、モサドは、世界一のエリートエージェントなのです。ほかには？」三島は、信じられないような報酬額に頭がぼんやりとしていた。

三島の間抜け顔を見たヤコブは、三島は手のひらに乗ったと確信し、安田に話しかけた。「安田、何か、質問は？」安田の不安は、完全に払しょくされたわけではなかったが、日本のために死ぬ覚悟は変わらなかった。「俺は、ヤマト民族だ。日本のために死ぬのだったら、本望だ。ヤコブ、よろしく頼む。俺たちにできることは、全力で遂行する」ヤコブは、大きくうなずき、右手を差し伸べた。安田も右手を差し出し決意を表した。続いて、三島も分厚く大きな手でしっかりと握手した。ヤコブを真の同志と思った安田は、旅館に宿泊することを進めた。「ヤコブ、今日は、旅館に泊まっていかないか。糸島の温泉につかって、疲れを癒してくれ。俺からのサービスだ。どうだ？」

二人は完全に手のひらに乗ったと確信したヤコブは、笑顔で返事した。「いや、気持ちだけで十分だ。5時に約束があるんだ」話し終えたヤコブは、すっと立ち上がり玄関に向かった。駐車場に止めていたベンツに乗り込むと一瞬にして消え去った。安田は、間抜け顔の三島に声をかけた。「おい、頭は大丈夫か？」夢のような報酬額に三島の頭はしびれていた。「は～～、大丈夫です。それにしても、1000万ですよ。夢のような話じゃないですか。嘘じゃないですよ。信じていいんですよ」安田は、何と言っていいか返事に困ったが、野となれ山となれの気分だった。「ヤコブを信じようじゃないか。俺たちはヤマト民族だ。死んで屍（しかばね）拾うものなし。腹をくくろう」

## 危険なビキニ

その日の午後3時を少し過ぎたころ、安田はリノに誘われティールームにやってきた。安田は、特に文句を言われることはやっていないと確信していたが、なぜか不安が込み上げてきた。対面して腰掛けるとリノがにらみつけてきた。これはヤバイと思った安田は、先制攻撃に出た。「おい、何だよ。俺が何をしたっていうんだ。俺は、神に誓って浮気はしていません。信じてくれよ〜」突然の弁解にリノは噴出した。「バ〜〜カ、何言ってるの。そんなことじゃないの。ゆう子のことよ。ほら、8月のデートのこと。思い出してよ。ゆう子のビキニ」安田は、1回生の大家とのデートを誰かにチクられたのではないかとビクビクしていた。そのことではないことがわかり、ホッとした。

「ゆう子のビキニがどうかしたのか？でも、ゆう子も結構大胆だよな〜〜。イサクのヤツ、よだれをたらして股間をジロジロ見てたぞ。さぞかし目の保養になったんじゃないか」リノは、目を吊り上げて安田をにらみつけた。「何言ってるの。そのビキニがいけないんじゃない。何よあの三角ビキニ。あれが、学生が着るビキニなの。熟女じゃあるまいし。みっともないったらありやしない。いったい何を考えてるのやら」安田は、リノが言っている意味がよくわからなかった。「俺は、いいともうがな〜〜。チョ〜〜セクシーだったぞ。似合ってたと思うがな。ゆう子は、今はやりのビキニって言ってた。いいんじゃないか？あれって、へんか？」

リノは呆れた顔で安田を見つめた。何かリノを怒らせるようなことを言ったのではないかと思い安田は身を引いた。男子は根っからのスケベと想ったりリノはあきれてしまった。「まったく、男子ってのは、スケベなんだから。あのね〜〜そのセクシーってのがいけないっていうの。ちょっと考えればわかるじゃない。あんなセクシーな三角ビキニを見せられたら、イサクはどう思う？俺に気があるんだな、セックスOKってことだな、って思うはずよ。そうでしょ。そうじゃない？」安田は、自分が思っていたことをリノが発言したことに驚きを隠せなかった。「リノもそう思うか。俺もだ。だから、必死になって、デートを阻止したんだが、ゆう子のヤツ」

腕組みをしたリノの顔は夜叉となっていた。「全く、どういうつもりなの。あんなんじゃ、次のデートでやられるな。まったく、能天気なんだから。ヤマト撫子も、地に落ちたもんだわ。バシッと、お仕置きをせねば」別にお仕置きってこともないと思い、なだめるように声をかけた。「いやま～～、そう、いきり立つこともないだろう。ゆう子は、軽い女子じゃないし。セックスは、バシッと断るんじゃないか？」何言ってんのという顔付きで安田をにらみつけた。「バカね～～。女子はイケメンに弱いんだから。甘い言葉を信じて、きっとやられる。イケメンの秀才よ。とにかく、何らかの策を練らないと。もうそろそろ、やって来ると思うんだけど」リノは、窓から南側の広い駐車場を見つめた。

安田は、これ以上何を言っていないかわからなくなった。こんなに怒り狂ったリノを見たことがなかった。5分ほど沈黙が続くとリノが声を上げた。「あ、やっと来た。ほら、見て、スウィッシュ」安田は、駐車場に目をやると玄関正面にある駐車場から歩いてくるジーパン姿のゆう子が見えた。「ゆう子じゃないか。噂をすればなんとやら」リノがすぐに返事した。「何言ってんの。お仕置きするために、呼びつけたのよ。ガッツリ、お灸をすえてやるから、覚悟しなよ」リノは立ち上がり、玄関にかけていった。お仕置きが待っていることを知らないゆう子は、無邪気な笑顔で手を振っていた。ゆう子を迎えたリノは、笑顔でティールームに案内した。嵐の前の静けさを思わせていた。

ゆう子がテーブルに着くと安田は、なるべく場を和らげようと明るい声で話しかけた。「スウィッシュ、どう調子？乗りやすいか？」リノの右横に腰掛けたゆう子は、笑顔で返事した。「とっても、乗りやすい。お母さんも買い物には最適って言ってた。女子でも取り回しできる重量で、バランスもナイス。思い切って買ってよかった。安田に、感謝」スズキ・スウィッシュはスズキ特約店の安田自動車が勧めたスクーターだった。「そうか。そうほめてもらうとうれしいよ。とにかく、安全運転で頼むな。事故でも起こされたら、俺の責任になるからな。まあ、ゆう子だったら、大丈夫だろ～」怒りを抑えたリノの気持ちを和らげようとワハハ～～と安田は大きな笑い声をあげた。だが、リノの表情には笑顔は起きなかった。

リノは右側のゆう子をじろっと見つめた。目を吊り上げたリノの顔を見たゆう子は一瞬身を引いたが、怪訝な顔で質問した。「そういえば、話ってなに？リノ」怒りを抑えたりノは、ゆっくりと諭すように話し始めた。「この前のデートのことよ。いったいどういうつもりなのか、聞きたいと思って」ゆう子には質問の意味が全く分からなかった。首をかしげたゆう子は返事した。「8月のダブルデートのこと？それがどうしたっていうの？ダブルデートは安田が考えたことじゃない。私は、別にどうでもよかったのよ。どうしてもって、安田が言うから、しぶしぶ承諾したんだから。文句言うなら、安田に言ってよ」

一瞬安田の顔が引きつったが、リノが間髪入れずに話し始めた。「ダブルデートのことを言ってんじゃないの。ゆう子のビキニのことよ。あのビキニはどういうことなのかって、言ってんの」ゆう子は、ビキニが似合わなかったといわれていると思い即座に反論した。「私が選んだから、それでいいじゃん。今はやりの三角ビキニなんだから。店員さんに、すっごく似合いますよ～～って言われたから、買ったんじゃない。かわいいと思うんだけどな～～。何か文句あんの？」

リノは、口をとがらせて反撃した。「どこがかわいいの。あのね～～、あんなひも付きの三角ビキニっていうのは、熟女が着るものよ。処女の女子が着るようなビキニじゃないわよ。処女なら処女らしいヴァージンビキニを着ればいいのよ。私だって、ゆう子のことを考えて、ちょっとダサ目のビキニを着たんだから」ゆう子は予想しなかったビキニの話に困惑した。処女にふさわしいビキニがあるなど考えてもいなかった。「それって偏見じゃない。処女がひも付きを着ちゃいけないっていう常識でもあるの？初めて聞いた。リノ、変なひがみはよしてよ」

目を吊り上げたりノは、今にも嘸みつきそうに大きく開けた口で叫び始めた。「何がひがみよ。ひも付きのビキニって、どう意味か分かってんの？イサクの目を見たら、わかんでしょ。どこ見てたと思うの。あのスケベなまなざし。あのビキニってのは、セックスOKって、言ってるのと同じってこと。わかる？全く、鈍感なんだから」セックスOKと軽い女のように言われたゆう子は、目を丸くして金魚のように口をパクパクさせていた。気を取り直したゆう子は、一呼吸おいて話し始めた。「セックスOKって、どういう意味よ。ビキニとセックスは関係ないじゃない。イサクも、かわいって、言ってくれたんだから。変な言いがかりはよしてよ。もう、リノって、変態じゃないの。イサクはまじめな紳士よ。イスラエルで選抜されたエリート留学生よ。セックスのことなんか、考えないわよ」

リノはあきれ返っていた。ゆう子が男子のことが全く分かっていないということは承知していたが、ここまでパ〜プリンだとは思わなかった。少しバカにしたような口調でリノは話し始めた。「あのね〜、イサクは紳士なんかじゃないの。ゆう子にはわかんないかもしれないけど、あの目は、間違いなくプレイボーイ。マジスケベ。そんなんじゃ、次のデートで、きっとやられる。ゆう子が、あんなプレイボーイが好きだとはね。ヤマト撫子も地に落ちたもんだわ」イサクのことを紳士と思っていたゆう子は、真っ赤な顔で反論した。「何言ってるの。イサクは、秀才で紳士よ。英語も教えてくれるやさしい学生よ。プレイボーイじゃないわよ。言っとくけどね〜、あくまでもデートであって、セックスOKなんかじゃないわよ。まったく、失礼しちゃうわ」

リノは、ここまでバカだと子供に諭すように話す以外ないと母親の気持ちで話すことにした。「あのね〜、ゆう子。男子ってものは、生まれながらにしてスケベなの。この世に紳士なんていないの。どんなにイケメンでやさしくて秀才でも、それは単なるカモフラージュに過ぎないの。心はセックスのことしか考えてないの。次のデートでは、きっとバリトンボイスの甘い言葉でホテルに誘われるから。ポ〜〜としてたら、ベッドの上。許してしまったら、あとは、適当に捨てられるだけ。捨てられた女は、男にしがみつく。運が悪いと、いいように利用されて、ヤクでも打たれて、悲劇の人生。わかった？」

ゆう子は、イサクを極悪人のように言ったリノをにらみつけた。しばらく目を吊り上げていたが、なぜか、リノが言っていることも、もっとものように思えてきた。ゆう子は、今後も、イサクとのデートでモサドの情報を得ようと思っていた。だが、安易に近づくのは危険だと察し、リノのアドバイスに耳を傾けることにした。「そいじゃ、今後、いつさい、イサクとは、デートしないようにってこと？誘われたら、何と言って断ればいいのかよ。初デートでセクシービキニまで見せたんだから。理由もなく、断ったら、イサク、きっと怒るわよ。女子からデートを断られたことなんてないと思う。ああ見えて、イサクって、かなりプライドが高いんだから。攻略するまで、絶対、後には引き下がらないわよ。どうすればいいのかよ」

腕組みをしたリノは、目を閉じてしばらく考え込んだ。一瞬笑顔を作りポンと両手を打ったりリノは、甲高い声で話し始めた。「こうなったら、目には目を。イサクの攻撃をしのぐには、カウンターストレートパンチ。彼氏を紹介するのよ。しかも、2, 3年付き合ってるような」即座に、ゆう子は目を丸くして叫んだ。「え、彼氏？そんなこと言われても。彼氏いないし〜」リノは、ニッコリ笑顔を作り、返事した。「いるじゃない。ほら、ゆう子の金魚の糞。わかるでしょ。あのブサイク！」ゆう子は、一瞬顔が引きつった。確かに鳥羽は、ファンだったが、彼氏にしたいという気持ちにはなれなかった。「え、鳥羽君。それは、ちょっと〜、ムリ」ゆう子はガクンと頭を落とし、うつむいてしまった。

リノは、ドヤ顔で返事した。「ゆう子、何、マジになってるの。あくまでもお芝居じゃない。ブサイクに、彼氏役をさせるのよ」ゆう子は、顔をゆがめた。いくら人がいいからといっても、彼氏役にさせるなどといえば、きっと怒ると思えた。「いくらなんでも、ちょっと、悪ふざけが過ぎるんじゃない」ハハハ〜とリノの笑い声が響いた。「大丈夫だって。きっとブサイクは喜ぶから。頭は天才でも、性格は忠犬ハチコ〜みたいに、かわいいんだから。ね、安田。そう思うでしょ」突然振られた安田は目を丸くした。確かに、鳥羽はゆう子のファンで、ゆう子への愛を純愛といっているが、さすがに、彼氏の役をさせてやるなどといわれれば、バカにされたと思い、腹を立てるんじゃないかと思えた。でも、この場は、あいまいな返事でごまかすことにした。

「そうだな～～、そういうことは、鳥羽に聞いてみないとな～～」リノは、ポンと手を打ち、安田に指示を出した。「早速、ブサイクを呼んで。ご馳走してあげるといえば、飛んでくるから。それと、ゆう子も一緒といえば、走れメロスのように全速力でやってくるんじゃない」鳥羽をだまし討ちに合わせるようで、安田は顔をゆがめた。「今からか？まあ、電話はしてみるけど」リノは、せかした。「善は急げ、今からよ。早く、電話して」安田は善ではないと思い、しぶしぶ電話すると即座に鳥羽が電話に出た。ゆう子も一緒なんだが、6時から会食しないか、と誘うと喜んで承諾した。「リノ、飛んでやってくる時。ゆう子が一緒だといったら、今から、すぐに、行きます、行きます、って興奮してた。30分もすれば、着くんじゃないか」

リノは、鳥羽がやってきたら知らせるようにと安田に言って、厨房にかけていった。安田は、裏切者になったみたいで、鳥羽がやってくる前にここから逃げ出したい気分だった。安田は、良かれと思ってやったダブルデートを反省していた。リノのお節介から、鳥羽に彼氏役を無理やり押し付ける展開になってしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。説教を食らった挙句、彼氏まで押し付けられたゆう子は、不安げな表情でオレンジジュースをすすりながら駐車場を眺めていた。しょんぼりしたゆう子に、安田は囁くような声で言葉をかけた。「悪かったな。こんなことになるとは。ダブルデートなんか、やらなきゃよかった。本当に、すまん」

安田に振り向いたゆう子は小さくうなずいたが、リノに説教されてゆう子も反省していた。男子を知らない自分が情けなかった。「安田が悪いんじゃない。私がバカだった。全く、ダメね。リノが言う通り。自業自得。でも、鳥羽君に何とお願いすればいいか。困ったな～～」安田も困り果てていた。呼び出したげくりノが彼氏の役をさせてやるなどといえば、人のいい鳥羽でもきつと怒るに違いない。安田も憂鬱になり窓の外をぼんやりと眺めた。4時に近づいたころ、アドレス125にまたがった鳥羽の姿が、駐車場に現れた。原チャリを止めた鳥羽は、大きく手を振りまっしぐらに玄関にかけてきた。安田は、リノに知らせるために厨房に向かった。

ゆう子は、神妙な顔つきで鳥羽を迎えに玄関に向かった。鳥羽はゆう子の顔を見ると笑顔であいさつした。「ゆう子先輩、お久しぶりです。お元気そうで何よりです。会食できるなんて、夢のようです」苦笑いしたゆう子は、ティールームに鳥羽を案内した。鳥羽がテーブルに着くとほどなくしてリノと安田がかけてやってきた。安田が声をかけた。「よ、突然呼び出してすまん。リノが、ご馳走したいっていうもんだから」腰掛けたリノは、笑顔で鳥羽に話しかけた。「鳥羽君が、いつも手伝ってくれるから、本当に助かってるの。今日は、そのお礼にご馳走するわ」鳥羽は、イセエビの生き造りや佐賀牛のステーキのご馳走を思い出した。「ありがとうございます。さすが太っ腹の若女将。いつでもお手伝いします。任せてください」

ニコッと笑顔を作ったリノは、早速、本題に入ることにした。「今日は、ご馳走のほかに、プレゼントがあるの。腰を抜かさないでよ」プレゼントと聞いた鳥羽は、目を輝かせて話し始めた。「うれしいな～～。プレゼントですか。僕は、男手一つで育てられたから、プレゼントなんてもらったことがないんです。ワクワクするな～～」リノはかしこまった表情を作り、鳥羽を見つめ話し始めた。「腰を抜かさないでね、プレゼントというのは、ついに、鳥羽君は、ゆう子の彼氏になれるんですう～～。おめでとう～～」リノは、パチパチパチと笑顔で拍手した。鳥羽は、リノの言っている彼氏の意味が、全く分からなかった。首をかしげた鳥羽は、問い返した。「彼氏って、どういう意味ですか？ゆう子先輩から、何も聞いていませんが。僕は、彼氏じゃなくて、ファンなんですけど」

リノは、ゆう子に振り向き小さくうなずいた。「今日から、鳥羽君はゆう子の彼氏になるの。ゆう子、そうよね」ゆう子は、小さくうなずきうつむいた。鳥羽は、彼氏になれるといわれても、納得がいかなかった。「彼氏ですか？ファンの間違いですよ、ゆう子先輩」ゆう子は、何と言って返事していいかわからず、リノに振り向いた。「びっくりするのも当然よね。まあ、彼氏といっても、ちょっと普通の彼氏じゃないんだけどね。まあ、何と言っていいか～、お願いといっていいか～、ま～、ある事情があって、鳥羽君に彼氏の役をやってほしいの。ダメかな～～。いやだったら、いいのよ」

神妙な顔つきになった鳥羽は、しばらく口を開かなかった。バカにされたと鳥羽は怒り狂うに違いない、と思ったゆう子と安田は、目をつぶってじっとうつむいていた。しきりに瞬きしていた鳥羽は、内心うれしかった。たとえ一時的な彼氏役でも、ゆう子姫の彼氏になれるのだったら、喜んで引き受ける気持ちになった。鳥羽は、びっくり箱から飛び出したピエロのような笑顔を作り、元気な声で返事した。「いや、いやだなんて。ゆう子先輩の彼氏役に抜擢（ぼってき）されるとは、一生に一度の幸運です。誠心誠意、全力をもってやらさせていただきます。よろしく、お願いいたします」ホツとしたゆう子は、緊張が一気に消えた。安田は、あきれた顔で鳥羽を見つめた。「そうか、やってくれるか。主役だぞ。よかったな～～」

鳥羽は首をかしげて尋ねた。「いったい、どういうことなんです？彼氏役ということは、誰かに僕を紹介するということですよ」リノが即座に返事した。「さすが、天才鳥羽君。そうなのよ。ほら、鳥羽君もしている、イケメンのイサク。イサクが、ゆう子に付きまってくるのよ。ストーカーみたいに。だから、ゆう子には、ちゃんと、彼氏がいるって、見せつけたいのよ」鳥羽は、イサクと聞いて、怒りが込み上げてきた。顔を真っ赤にした鳥羽は、選手代表のように大声で宣誓した。「あのユダヤのイサクですか。全く、けしからんヤツだ。ヤマタイコクのゆう子姫を略奪しようなんて、もつてのほか。僕が彼氏になった限り、指一本触れさせません。安心してください、ゆう子姫」

ちょっと勘違いしているように思えたりノは、マジになった鳥羽にくぎを刺した。「鳥羽君。あくまでも、彼氏役だからね。彼氏じゃないのよ。そう、張り切らなくてもいいんだけど」鳥羽は、胸を張って応えた。「わかってますとも、若女将。彼氏でなく、彼氏役です。光栄なる役職を授かり、感謝いたしております。だからこそ、命を懸けてゆう子姫をお守りする所存です。イサクに一度会った時から、うさん臭いヤツだと思っていたんです。イサクといい、ヤコブといい、何を企んでいるのか。きっと、ヤツらの化けの皮をひん剥いてやる。今に見てろ」

鳥羽の話聞いて、安田もヤコブへの不信感が沸き起こった。安田はヤコブたちをモサドだと信じていたが、次第に不信感が募ってきた。モサドへの誘いはいったい何だったのか？と疑問に思い始めた。高額報酬も不自然に思えてきた。バカな学生をモサドに誘うことに疑問を感じていた安田は、鳥羽の考えに興味をわいてきた。「おい、ヤツらは、モサドだといっていたが、本当だろうか？確かに秀才だと思うんだが、俺も、何か裏があるように思えてならん。ヤツらは、詐欺師かも？」鳥羽は、大きくうなずき返事した。「ヤコブたちは、紳士で秀才です。だからといって、頭から信用しないほうがいいと思います。ヤコブの目つきは、只者ではありません」

リノが不安げな顔で質問した。「イサクとか、ヤコブって、イスラエルの留学生じゃないの？」鳥羽は、自分の直感を話すことにした。「あくまでも、憶測ですが、彼らは、マフィアとつながりがあるんじゃないかと思うんです。今、日本には優秀なマフィアが全国各地に潜伏しているという噂があるんです。学生に成りすましたマフィアがいてもおかしくはないのです。先輩、ヤツらの言動には、十分警戒したほうがいいと思います。いずれ、きっと、甘い言葉を使って先輩にアクションをかけてくるはずですよ」マフィアという意外な言葉が耳に入ると安田の鼓動が激しくなった。ヤコブの話の思い返せば返すほど、不自然さを感じ始めた。

## AI脳兵士

毎週土曜日に定例ミーティングが行われていたが、今週はイサクのマンションで行うことになっていた。9月8日（土）、午後7時少し前に、生物兵器開発プロジェクトリーダーのヤコブは、AI兵器開発プロジェクトリーダーのイサクのマンションにやってきた。リビングで二人は今後の活動について話し始めた。キリマンを一口すすったヤコブはイサクに尋ねた。「地下研究所建設の進捗（しんちよく）状況のほうはどうなんだろう？」イサクは、今朝、本部から入手した情報をの述べた。「来年の夏ごろには、O研究所とK研究所の二つは、稼働できる見通しらしい」ヤコブがうなずき応答した。「日本に地下研究所を作れば、アジアを制覇できたも同然だな。いったい誰が想像しただろう。AIが脳操作兵器に利用されるとは。俺も、まさかAIがここまで進化するととは思わなかった。人間を最強兵器にできるのも時間の問題だな」

イサクがうなずき話を続けた。「大統領と幹部議員をコントロールできれば、国家を自由自在に操作できるわけだからな。全く、AIには恐れ入った」ヤコブがワハハ～～と笑い声をあげたが、即座に、鋭いまなざしでイサクを見つめた。「あとは、優秀な科学者を集めるだけだ。でも、ちょっと気になることがある。あの天才ブサイクだ。あいつの目は、俺たちを疑っている。しかも、安部教授の子分と来てる。万が一、俺たちに接近してきたら、要注意だ。俺たちの素性に感づいたのかもしれない。イサク、ゆう子も油断ならんぞ。彼女の様子もおかしい。とにかく、ヤマト民族を甘く見るとこっちがやられる。俺たちは、ヤマト民族について研究不足だったような気がする。石橋をたたく気持ちで事を運ばねば」

眉間にしわを寄せ考え込んでいたイサクが口を開いた。「とにかく気になるのは、ブサイクと謎の安部教授だ。安部教授は、AI兵器開発と米露中相手に兵器売買を行っている桂コーポレーションとつながっている。ということは、だれも潜入できないという魔界島での研究に彼もかかわっているのではなかろうか？」ヤコブが、一瞬顔をしかめ、つぶやいた。「とにかく、ブサイクには要注意だ。イサク、ゆう子にも油断するんじゃないぞ」イサクが小さくうなずいた。「承知した。俺たちは、日本の優秀な若い科学者を集めることに専念すればいい。でも、ブサイクは、実にもったいない人材だ。俺たちの仲間に入れることができれば、きっと、役に立つんだが」

ヤコブは、顔をゆがめ返事した。「確かにブサイクは、天才だ。でも、ブサイクだけには、気を許すな。ちょっとした言動から、素性がばれる。ヤツは、安部教授に逐一俺たちのことを報告しているかもしれん。もしかしたら、ゆう子も安部教授とつながっているかもしれん。ゆう子とブサイクは、高校時代からの友達というじゃないか。とにかく、油断は、禁物だ。そう、安部教授は、病院建設予定地として九州の土地を買い占めている。まさか、桂コーポレーションに依頼されて、病院の地下にAI兵器開発研究所を作るつもりじゃないだろうか？その代償として、多額の研究費を得ているのでは？」

イサクは、大きくうなずいた。「それは、考えられる。桂コーポレーションは、AI兵器のパイオニアだ。俺たち以上の研究をやっていてもおかしくない。もしかしたら、安部教授は、桂コーポレーションから得た多額の研究費で天才遺伝子開発をしているのでは？」生物兵器開発プロジェクトリーダーのヤコブが興味を示し即座に質問した。「どういうことだ？」イサクはうなずいた。「俺たちも議論していた頃があったじゃないか。グリア細胞を活性化させるニューロンの形成だ。そして、IQ1000の超天才科学者を作り出そうというわけだ。でも、そう簡単に解決される課題ではない。安部教授でも、時間のかかる研究だ」顔を紅潮させたヤコブは、語気を強めて話し始めた。「その研究は、俺もやりたい。でも、本部の命令は、AI脳兵士開発だ。安部教授がうらやましいよ」

イサクはヤコブをなだめるように返事した。「脳の研究をしているヤコブの気持ちはわかる。でも、何度も言うように、生物学的に不可能なことに時間をかけるより、AIとニューロンをリンクさせたAI脳を開発したほうが、兵器として利用できる。とにかく、一刻も早く、AI脳の完成に向けて研究を進めよう。そのためにも、科学者を九州に集結させなければ」一度うなずいたヤコブだったが、未練がましく話を続けた。「確かにAIの脳への利用は、実用的だ。だが、ニューロンをもっと利用するためにグリア細胞をいかに活用するかの研究も大切だ。俺は、この研究にこだわりたい」

イサクは、また同じことを繰り返しているとあきれた顔で返事した。「ヤコブの悔しい気持ちはよくわかる。だが、俺たちは、不可能に近いことに費やす時間はない。世界をユダヤ帝国にするには、まずは、人間を操作できなければならない。そのためには、一刻も早くAI 脳を開発することじゃないか？ヤコブ」ヤコブは、納得がいかない表情だったが、大きくうなずいた。「そうだな。俺たちは、結果を出さなければならない。まずは、政治家たちの脳をコントロールして国家を操作すること。そして、地球を支配するユダヤ帝国をつくること。そういつているイサクこそ、ゆう子に惚れて、裏切者になるんじゃないぞ」

心のゆるみを突かれたイサクは、顔をゆがめて頭をかいた。気まずそうな顔でイサクは話し始めた。「いや～、痛いところを突かれた。あ、そう、腰を抜かすような話があるんだ。今週の火曜日に、偶然、ゆう子と校門前で出会ったんだ。8月のデートで攻略できそうな気がしたもんだから、ゆう子をデートに誘おうと思い、9日、日曜日の予定を聞いたんだ。ところが、デートの約束があるというんだ。その相手というのが、だれだと思う、あのブサイクなんだ。青天の霹靂とはこのことを言うんだな。全く、自分の耳を疑ったよ」ヤコブが、ワハハ～～と笑い声をあげた。「それって、冗談だろう。まさか、あんなブサイクが、彼氏？それはない、ゆう子は、アイドルだろ。冗談がすぎないか」

イサクは、首をかしげて返事した。「いや、俺も、冗談だと思いたいさ。でも、鳥羽とは、高校から付き合っているんだとき。ヤマト撫子の心は、なぞだな。まったく、まいるよ」ヤコブが、腕組みをして考え込んだ。何かひらめいたかのような顔で話し始めた。「おい、ちょっと警戒したほうがいいぞ。もしかすると、ブサイクは俺たちに接近しようとしているのかもしれん。イサク、ゆう子にも、要注意だ」イサクもマジな顔つきになり返事した。「いや、俺もうかつだった。確かに、ゆう子に関しては、油断していたような気がする。ところで、ゆう子の友達だという鳥羽なんだが、実に興味ある人物だ。ヤツは、姫島という孤島で生まれている。しかも、幼少のころに母親は失踪し、その後は漁業で生計をたたっていた父親の男手一つで育てられた。さらに不運なことに、中学3年生の時に、父親も漁に出たまま失踪している」

ヤコブは、身を乗り出し大きな目をむき出して耳を傾けていた。「ほう～、まさしく、ミステリアスなヤツだ。かわいそうな気もするが。ほかには？」イサクは、低い声で淡々と話を続けた。「そして、なぜか、当時、担任をしていた小柳ルミ子教諭が、彼を養子として引き取り、糸島高校に進学させている。また、高校2年生の時、数学オリンピックで金メダルを取っている。現在、安部医科大学に在籍しているが、安部教授が特待生として入学させている。まったく、謎の天才だな」ヤコブは、何度もうなずき真剣なまなざしで聞き入っていた。「孤島の天才か。まさにミステリアスなヤツだ。それにしても、あんな孤島に天才が生まれるだろうか？父親は、漁師だろ～、漁師の子が天才だとはな～～」

イサクが、思い出したような表情で話し始めた。「いや、言い忘れていた。彼の父親は、漁師だったが、Q大の理学部で物理を専攻している。まあ、秀才ではあるわけだ。はっきりしたことはよくわからないのだが、学生時代、革マル派の彼は、過激な革命運動をやっていたらしい。いつごろからかは、はっきりしないが、姫島にやってきて、漁師になったということだ。姫島では、青年団のリーダー的存在だったらしい。そう、肝心なことを言い忘れていた。噂らしいのだが、結婚後5年たっても、子供ができないといって近所に愚痴をこぼしていたらしい。ところが、志摩総合病院で不妊治療をしたところ、突然、妊娠したらしい。生まれた子が、天才ブサイクだ。これも、奇妙なことだ」

日本人離れした鳥羽を思い浮かべていたヤコブは、ますます彼の素性に興味がわいた。「志摩総合病院か。ということは、その時、安部教授がかかわっていたと考えても不思議ではない。安部教授は、脳外科医であり、遺伝子研究の第一人者だ。となれば、失踪したという母親は、遺伝子操作実験に利用された可能性もある。その結果、誕生したのがブサイクということだ。そう考えても、決して不可思議ではない。いや、その可能性は高い。天才でブサイク。肌はライトブラウン、筋肉はしなやかで強靱。どう考えてみても、ヤマト民族の遺伝子ではない。きっと、遺伝子操作がなされている。だから、あんな孤島で天才が生まれたんだ。イサク、安部教授は、とんでもないことをやってるぞ」

イサクも日本人離れした鳥羽の姿を想像していた。遺伝子操作で何かの異変が起きブサイクな顔の天才が誕生したに違いない。安部教授は、東京だけでなく糸島という片田舎に医科大学と総合病院を建設している。これも何か謎めいている。やはり、桂コーポレーションがかかわっているのか。鳥羽は、安部教授の弟子だ。ということは、安部教授の研究にも携わっているに違いない。ならば、研究内容について何らかの情報を持っているはず。「まったく、鳥羽といい、安部教授といい、不思議な連中だ。ちょっとあくどいやり方だが、鳥羽をひっ捕まえて、安部教授の研究について吐かせてみるか？」

ヤコブは、即座に返事した。「まあ、そんなことをしても無駄だな。たとえ、拷問を受けたとしても、俺たちにゲロすることはないだろう。ヤツは、そこいらの学生たちとは訳が違う。安部教授に操作されているロボットのようなものだからな」イサクも納得した表情で本来の使命を口にした。「そうだな。余計な寄り道をしている時間はない。一刻も早く、九州を第二のイスラエルにしなければ。そのためには、日本の同志を増やし、彼らをモルモットとして利用することだ。ところでヤコブ、ユダヤAIチップの右脳への設置はうまくいきそうなのか？」

ヤコブは、ほぼ人体実験の段階に入ったことを説明することにした。「ユダヤAIチップは完成している。あとは、右脳に設置するだけだ。問題は、アウトプットさせる左脳がAIの信号に従って正確に機能するかなんだ。右脳は機械で左脳は生物だ。この関係が正常に機能してくれるかは、人体実験して見なければわからない」イサクは、うなずき人体実験の計画を尋ねた。「人体実験に日本人を使う予定なんだな。安田と三島も」ヤコブは、顔を左右に振った。「いや、しばらくは、彼らには設置しない。彼らは、ベンチャー企業で働いてもらい、優秀な若者を採用してもらおう。採用された若者から、特に優秀な人物に実験する。AIを設置された被験者は、IQ10000の頭脳を持つことになる」

イサクは、「フユ〜」と口笛を鳴らし、笑顔を作った。「AIと頭脳のコラボか。IQ10000の天才AI脳兵士の誕生ってわけか。素晴らしい。人類史上、最強の天才兵士となるわけだな。でも、天才AI脳兵士がユダヤを裏切るといえることはないだろうな？」ヤコブは、右口元を引き上げ、少し不安げな表情で答えた。「右脳のAIは、ユダヤAI言語にしたがって作動する。だが、左側半分は、生物の脳だ。その生物脳が突然、ユダヤに反抗することも想定しておいかなければならない」イサクは、不安げな表情で尋ねた。「万が一、AI脳兵士が、ユダヤに反抗した場合、どういう対応をするんだ。AI脳兵士はIQ10000の超天才だぞ。俺たちだって、到底太刀打ちできる相手じゃない」ヤコブは、小さくうなずき返事した。「万が一のことを想定し、AI脳コントローラーで右脳のAIに命令を出す」

イサクは、身を乗り出して尋ねた。「いったい、どんな命令を？」ヤコブは、一呼吸おいて答えた。「左脳へ高電圧を流す命令だ。つまり、左脳のシナプスを破壊する。一瞬にしてシナプスは破壊される。ユダヤにしたがわないAI脳兵士は、脳死してもらおう。これが、最も効率的なAI脳兵士の活用だ」イサクは、目を丸くしてうなずいた。「なるほど。ユダヤAI脳兵士が完成すれば、ユダヤ帝国も実現するということだな。実に愉快だ」ヤコブは、大きくうなずき話を続けた。「地球だけではない、宇宙もユダヤが支配できる。ユダヤAI脳兵士は、宇宙に飛び立ち、宇宙基地を建設していく。もはや、宇宙は、ユダヤのものとなる」

イサクは、即座に立ち上がりサイドボードに向かった。「さあ、祝杯をあげようじゃないか。ユダヤ宇宙帝国を祝って」イサクは部屋中いっばいに張りのあるバリトンボイスを響かせた。そして、二つのグラスを左手にナポレオンを右手にわしづかみにした。ニヤツと笑顔を作り声をかけた。「ホ〜ラよ」イサクは、右手のナポレオンをヤコブに向かって放り投げた。ナイスキャッチしたヤコブに向かって右手の親指を立て、ソファーに腰掛けると二つのグラスをテーブルに並べた。イサクは、グラスにコクコクコクッとブランデーを注ぐとヤコブに差し出した。「さあ、乾杯だ」二人はグラスを手に取り持ち上げるとカキ〜ンとグラスを響かせた。

イサクは、突然、ソロモンからのメールを思い出した。「そう、T大のソロモンが9月15日、土曜日に福岡にやってくる。何か、朗報があるみたいだ。楽しみだな」ヤコブは、笑顔で応答した。「そうか。スカウトリストの報告だな。三人で解析しようってわけか。ワクワクするな。そうだ、はるばる博多にやってくるんだ、中州にでも案内して、遊ばせてやるか。あいつ、女には目がないからな。きっと、鼻血ブ〜〜で喜ぶぞ」ヤコブのワハハ〜〜という大きな笑い声が響いた。「きっと、噴水のような潮吹きは初めてじゃないか。プラチナのローズ・コジマを紹介してやろう」イサクもワハハ〜〜とバリトンボイスを響かせた。